令和2年度　環境科学院　修士論文内容の要旨

銃猟者が捕獲対象とする動物種および捕獲方法の現況と継続性：大分県竹田市の事例

北海道大学大学院環境科学院
環境起学専攻　人間・生態システムコース
古賀　裕基

本研究の目的は銃猟者が捕獲の対象とする動物種の現況と継続性，および捕獲時に用いる捕獲方法の現況と継続性について定量的に明らかにすることである．調査は大分県竹田市で行った．研究に用いたデータは竹田市役所から提供を受けたものに加え，竹田市猟友会所属の全銃猟者（117名）を対象とした全数アンケート調査，聞き取り調査（非構造化面接，参与観察）により取得した．アンケート調査は2019年12月に実施した．117名に質問紙を配布し87名から解析に使用しうる回答を得た（回答率74.4%）．調査の結果，動物についてはイノシシ，ニホンジカ，カラス類に捕獲が集約されつつある現状が示された．特にコジュケイ，ノウサギ，キツネについては既に捕獲者が激減していることが示された．捕獲方法については猟犬を使った渉猟が減少し，待ち伏せ型の方法に置き換わりつつある状況が示された．このような状況の要因としては以下の点が指摘できる．捕獲者が減少傾向にあり今後捕獲が継続されない可能性が高いと考えられる動物種については，1）現時点では主たる害鳥や害獣に該当しないこと，2)採れる肉の味または量に難があり食肉としての価値が低いこと，3）捕獲が重労働であること，4）動物側の生態上の特徴から銃猟時の誤射のリスクが高いこと，5)毛皮等食肉以外の需要の低下の影響を受けていること，6）地域の畑地の作付け品目が変化したことによって旧来の餌が減少し個体数が減少や行動圏の変化がみられること，7）大型獣（イノシシとニホンジカ）が行動圏を広げたことに伴い発生した生息環境の攪乱に起因する，個体数の減少や行動圏を人里付近に移すという行動変化がみられること，のいずれかの要素を抱えていることが指摘できた．猟犬を使った渉猟が減少している背景には，1）猟犬に魅力を感じる銃猟者が減少していること，2）猟犬飼育のコスト，すなわち①猟犬の確保や維持のための金銭的費用，②猟犬の入手や調教の方法の調査に係る労力，③育成や調教を行うための時間や体力，④飼育場所の確保のための金銭的費用や労力，などが減少していない，または増加傾向にあること，2)大型獣の行動圏の拡大に伴い，①大型獣以外を捕獲する時に猟犬が意図せず大型獣と接触してしまう，②大型獣の捕獲を目的としたくくり罠に猟犬がかかってしまうなど，猟犬の寿命を縮めてしまう事故のリスクが近年増加していること，3）特に鳥猟で捕獲対象動物が捕獲に必ずしも猟犬を必要としないカラス類に集約されつつあること，4）待ち伏せ型の捕獲は渉猟に比べて脚力が要求されないため，高齢となったり参入年齢がそもそも高齢であったりする銃猟者でも採用できる方法であること，5）銃猟の目的がレジャーや生物資源の確保から鳥獣被害の防止に移り変わっていることに伴い，運動や資源探索のために山野を歩き回る渉猟から田畑にやってくる個体を選択的に仕留める待ち伏せへと捕獲形態が変化してきていること，などが明らかになった．捕獲対象の偏りと猟犬を用いた渉猟から待ち伏せ型の捕獲への転換傾向は今後も続くと予測される．その影響として1）地域の行政や住民が得ることのできる，野生動物に係わる情報が減少すること，2）鳥獣被害対策や個体数管理の際に野生動物に対して取ることのできる手段の減少，特に，追い払い対策が困難になること，3）銃猟者の空白が続く動物種や捕獲方法については，捕獲に係わる技術や知識が消失すること，などが危惧される．